PISA IN FOCUS 34

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

教育における成績優秀者と改革成功者とはだれか。

- 教育における成績優秀者と改革成功者は、幾つかの重要な特徴が共通している。生徒全員の可能性を信じていること、強い政治的意思、そして関係者全員が向上に向けた協調的努力を継続する能力である。
- 何年もかけて読解力の成績を向上させてきた国や地域は、成績の振るわない生徒の割合を減らす、成績優秀な生徒の割合を増やす、生徒たちの社会経済的地位が成績に及ぼす影響を弱める、などによって、それを実現した。

PISA調査結果を公開すると必ず、参加する国・地域内の教育政策に関する活発な議論が巻き起こる。充実した生産的な人生に向けて生徒たちに準備させる上で、教育システムの成否に関するこの3年ごとの調査から得た結果に関心をもつべき理由とは何か。PISA調査は、単に15歳という一時点の生徒たちの読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーにおける成績を切りとって見るだけのものではなく、その将来を大まかにとらえるものでもある。OECD国際成人力調査（PIAAC：ピアック）の成果の一つである最新の成人スキル調査では、PISAの各国の成績と、実施年度に対応する年齢層のその後の人生における読解力、及び数的思考力の習熟度との間に密接な相関関係が見いだされている。成人力調査による結果は、高度なスキルを身につけた成人が、スキルの乏しい成人と比べ、雇用される可能性は2倍、平均以上の給与を得る可能性は3倍近いことも示している。言い換えれば、スキルの乏しいことによって人々は、より給料がよく、やりがいのある仕事に就く可能性が著しく限られる。スキルの高い人々は進んで事に当たる可能性も高く、自らを政治的プロセスの対象者というよりも、行為者と見て、より他人を信用する傾向がある。したがって、公共政策における公正、倫理及び社会的包摂はすべて市民のスキルにかかっている。

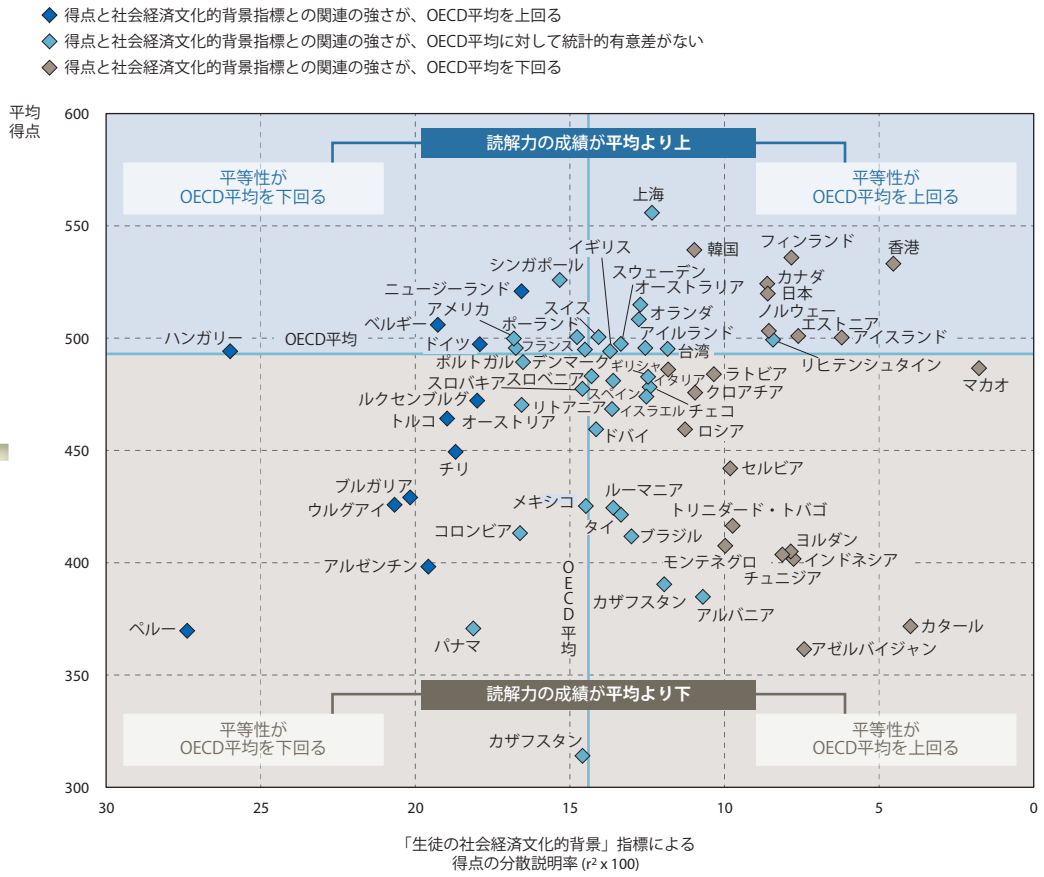
PISA IN FOCUS

PISA調査は教育における成功を評価する…

こうしたスキルの多くは義務教育期間中に獲得される。PISAは義務教育期間を終える頃に生徒たちが何を知っているかを評価するだけでなく、その知識で何ができるのかを評価する。同じように重要な点として、生徒の成績と、学習に対する生徒たちの態度、社会経済的背景、教育の政策・慣行・資源などの成績に関連する要因を、参加している国及び地域の間で比較することにより、PISA調査は政策立案者や教育者に世界の最も効果的な教育政策を明らかにする方法を提供し、それを彼らはそれぞれ地元の状況に適合させることができる。

数年間にわたり、PISA調査が明らかにしてきたのは、教育における**成績優秀者**は、例えば、カナダ、フィンランド、香港、日本、韓国、ニュージーランド、上海など、様々な地域に見られ、多様な文化的伝統をもち、異なる発展段階にあるということである。PISA調査の結果は、優秀な成績を獲得するために教育における平等を犠牲にする必要はないことも示している。一部の優秀な成績を収めた国々では、社会経済的に不利な立場にある生徒たちが、恵まれた生徒たちと同じように好成績を収めている。例えば、カナダ、エストニア、フィンランド、香港、アイスランド、韓国及びリヒテンシュタインは、いずれも読解力で平均以上の成績を示し、他の国々よりも社会経済的地位が成績に及ぼす影響が少ない場所である。

平等と優れた成績が両立しないということはない



「生徒の社会経済文化的背景」指標による得点の分散説明率 (r^2 x 100)

出典：OECD PISA 2009 database, Table II.3.2.

StatLink http://dx.doi.org/10.1787/888932343589

…そして、国や地域がそれぞれの教育システムを改善可能な方法を示している。

調査開始から10年以上がたった今、PISA調査はこの期間中の生徒の成績の改善状況も示すことができる。21世紀の最初の10年間が終わる時点で、15歳の子供たちの読解力が2000年の同等の子供たちよりも優れていたとして、改革が成功したとみなし得る国々が、2009年のPISA調査で明らかになった。比較可能な情報のある26の国々のうち半数、すなわち、アルバニア、ブラジル、チリ、ドイツ、ハンガリー、インドネシア、イスラエル、韓国、ラトビア、リヒテンシュタイン、ペルー、ポーランド及びポルトガルでは、2000年から2009年までの間に読解力が向上した。このように多様な国々が生徒たちの成績の水準を引き上げることに成功したという事実は、文化、伝統、開発レベル又は当初のスキルレベルとは関係なく、どこの国でも向上できることを更に示している。

ブラジル、インドネシア、ペルーなどの国々では、読解力の得点が上がり、平均をはるかに下回っていた2000年から、2009年には平均にずっと近づくほどになった。これらの国々は、読解力の振るわない生徒たちの割合が著しく低下した。その他の国々では、例えば日本や韓国など、最高水準に到達する生徒たちの割合を増やすことにより、既に優れた成績を更に高めている。当初、成績水準の異なっていたアルバニア、チリ、ドイツ及びラトビアといった国々では、生徒たちの社会経済的地位と読解力との関係が弱まり、生徒全体の読解力の成績が向上した。

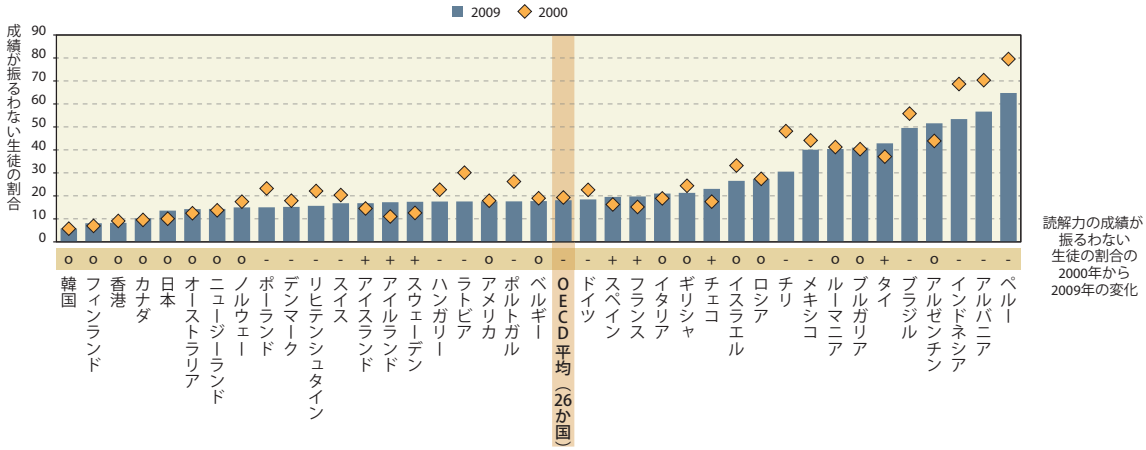
これらの例は、読解力、数学、科学における生徒たちの習熟度が、あらかじめ定められたものでも、固定的なものでもないことを示している。適切な条件の下で、すべての生徒は向上できる。PISA調査はこうした条件、すなわち、生徒たちにより効果的な学習の機会を与える具体的な慣行及び政策の特定に役立つ。

教育システムの向上は利害の大きい共同責任である。

しかし、PISA調査は、比較可能な情報のある国々のほぼ半数では、2000年から2009年までの間に生徒の成績に向上がみられなかったことも示している。こうした結果を合わせてみると、教育における向上には政治的意思、協調的努力の継続、そして政策立案者、教育者、生徒一人一人とそれぞれの家族が共に責任を担うことが必要であるという事実が強調されている。

さらに、PISA調査では、生徒たちが自らの創意工夫を通して急速に変化する環境に適応する能力も把握しようとする。例えば、2009年にPISA調査で試験対象となったデジタル読解力では、オンライン教材を利用し、デジタルで得た情報を利用する準備が15歳の子供たちにどの程度できているかを調べた。

PISAの成績が振るわないことは、その後の困難の兆しとなり得る



注：2009年の読解力において成績が振るわない生徒（習熟度レベル2を下回る）の割合の小さい順に左から国名を並べている。

出典：OECD PISA 2009 database, Table V.2.2.

StatLink 新刊 http://dx.doi.org/10.1787/888932359967

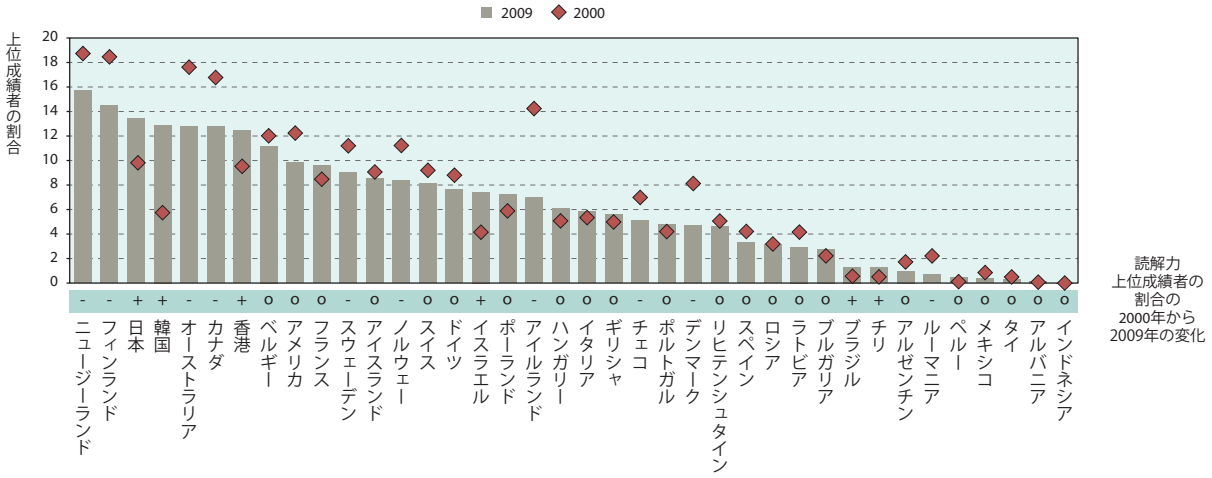
	2000年と比べて2009年が高い	2000年と比べて2009年が低い	統計的に有意な差は見いだされない
95%信頼水準	+	-	o

PISA IN FOCUS

15歳の子供たちには、日々の生活でコンピュータの使用がますます求められていることから、2012年にはデジタル読解力評価にデジタル数学的リテラシーの評価と、初めてとなるデジタル環境で設定された複雑な問題を生徒たちがどれほどうまく解けるかについての評価が追加された。また、PISAは、2008年の金融危機を受けて提起された課題にも応え、15歳の子供たちが金融の概念を理解し、金融情報を利用して情報に基づく意思決定を行うことができるかについて把握する、生徒たちのファイナンシャルリテラシーの相対評価を策定した。

したがって、なぜPISA調査の結果に関心をもつべきなのかと問うのであれば、自分の子供の未来、自分の学校又は職場での成績、そして自分の国がグローバル化の進む経済において競争する能力について考えよう。それが関心をもつべき理由である。

各国の人材プールの源となっているのは、それぞれの上位成績者である



注：2009年読解力の上位成績者の割合の多い順に左から国名を並べている。

出典：OECD PISA 2009 database, Table V.2.2.

StatLink http://dx.doi.org/10.1787/888932359967

	2000年と比べて2009年が高い	2000年と比べて2009年が低い	統計的に有意な差は見いだされない
95%信頼水準	+	-	o

結論：あらゆる場所のすべての生徒たちに、成績優秀者になること、成績を向上させること、又はその両方が可能である。PISA調査の結果は可能なことを明らかにするばかりでなく、教育において優秀さを達成する上で政治的意思、協調的努力の継続及び関係者全員が責任を共有することの重要性も強調する。

本稿に関するお問合せ先

担当：Andreas Schleicher *(Andreas.Schleicher@oecd.org)*

出典：OECD (2010), *PISA 2009 Results: What Students Know and Can Do: Student Performance in Reading, Mathematics and Science*, Volume I, OECD Publishing;
OECD (2010), *PISA 2009 Results: What Makes a School Successful? Resources, Policies and Practices*, Volume IV, OECD Publishing.

参考サイト
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ：
「PISA2012年調査による主な結果」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。